



過激な「直接行動」で
世間を騒がす環境団体。
シーシェパードに
会ってきました。



「シー・シェパード」の船旗は、今年も南極の海にはためいた。④

環境と闘う

environmental activists

001
カナダ
ポール・ワトソン
「シー・シェパード」創設者



グリーンファイター界のダース・ベイダー？ シー・シェパード の休日。

ポール・ワトソン独占インタビュー。

南極海で、日本の捕鯨船との対立をエスカレートさせている「シー・シェパード(SS)」。そのリーダー、ポール・ワトソンさんが『ソトコト』の単独取材に応じてくれました。給油のためオーストラリアのパースに寄港中の船を訪れ、組織のこと、必死にクジラを守ろうとする理由など、詳しい話を聞いてきました。

photographs by Barbara Veiga④, Joanne McArthur⑤ & Sea Shepherd Conservation Society
text by SOTOKOTO translation by Junsuke Tokano

ポ

ール・ワトソンさんが初めて「行動」を起こしたのは10歳の時、カナダの森林でのことだった。ある夏、ポール少年は一匹のビーバーと友達になる。翌年の春、再会を果たそうと森を訪れた少年が目にしたのは、毛皮商人の罠にかかった無残な「友達」の姿だった。怒り狂った少年は、森中の罠をすべて破壊した。

以来40年、大事な友達を殺された怒りの炎は消えず、動物たちを守るために闘い続けている。南極で日本の調査捕鯨船への抗議活動を展開中のポール・ワトソン船長。その束の間の休日

に彼を訪ね、その人柄や使命、そして代表する組織「シー・シェパード」について詳しい話を聞いた。

ソトコト(以下S) まずは、環境保護活動を始めた頃についてのお話をお願いします。

ポール・ワトソン(以下W) アメリカの海上核実験に反対するある団体に参加したのが最初の組織活動です。私は、後に「グリーンピース」と改名されたこの団体の設立メンバーでしたが、他のメンバーと考えが合わず、人間関係にも問題があったので1977年に脱退しました。なぜなら、私の本来の目的は「反対運動」ではなかったのです。抗議の声に聞く耳を持たず、動物たちへの犯罪行為を繰り返す連中をただ茫然と眺めるだけなんて、相手に服従するも同然、まるで物乞いです。私は無意味な殺戮行為をこの手で阻止したかった。だからシー・シェパードを立ち上

げたのです。

S シー・シェパード(以下SS)の活動についてお聞かせください。

W 海洋生物を保護する組織です。抗議団体ではありません。海を破壊する違法行為を阻止するため、介入活動を行っています。具体的には、公海や海洋保護区での密漁、流し網漁、捕鯨などが対象です。行動を起こすのは「違法」であるという確かな証拠がある場合にに限られます。国際法を行使する意志と力を兼ね備えた唯一の組織、それがSSです。

S 攻撃的に介入することも多いようですが、どのような権限で行っているのでしょうか。

W 1982年に批准された「国連世

私がやっていることは、メディアをうまく利用した新しい環境保護のアピールだよ。

ワトソンさんがグリーンファイターたる理由。

海洋生物の保護に人生をかけている。
メディアを利用した新しい環境活動を展開。
次世代の活動家の育成も行う。

『ソトコト』の、前回の「グリーンファイター」特集号(2009年5月号)に目を通すワトソンさん。記事の内容までは理解できないものの、彼の知る人物が数多く紹介されていることに、嬉しい驚きの連続。日本の環境保護団体の活動にも興味を示した様子でした。④



シー・シェパードの“黒船”カタログ



シー・シェパード号(1978~1979)
海賊捕鯨船(国旗なし)「シエラ」を沈めたことで有名。ポルトガル政府に押収された後、SSが自らの手で沈没させた。



シー・シェパード2号(1980~1992)
アザラシ漁への抗議中、カナダの沿岸警備隊に攻撃された(写真)。旧・ソ連の捕鯨船などの違法活動との闘いでも活躍した。



ファーレイ・モワット号(1996~2009)
1957年に建造されたこの船は、アザラシ漁への抗議行動によりカナダ政府に押収されるまでは、SSの旗艦として活躍した。



ボブ・バーカー号(2009~)
1950年に捕鯨船として造られたが、SSの船としては南極海でデビューしたばかり。5月からは地中海で活動する予定。

の捕鯨者たちも同じです。私の父親はデンマーク人なのに。すっかりお決まりの反応になっていますが、濡れ衣もいいたころです。私は人を差別しない、というより人間そのものが嫌いなのですから(笑)。人間という種は地球を破壊することに熱心で、私はそれを阻止するために生きています。人が自分をどう思うかなんて、どうでもよいのです。人間のためにやっているわけではないので。私が尽くす相手は、自分を守る術を知らない声なき動物たち、人間と同じくこの地球に存続する権利を持った動物たちなのです。

日本に関していえば、捕鯨者が典型的な日本人だというのは、マフィアが典型的なアメリカ人だというのと同じです。私は日本文化にも日本人にも敬

知られざるポール・ワトソンさんの6つの過去

1 ずっと前から、海で活躍
ワトソンさんが「海の男」になったのは17歳の時。商船の船員や、カナダの沿岸警備隊員として活躍したこともある。

2 プライベートでは?
かつて中国系カナダ人と結婚していたワトソンさん。ハーフの娘さんは、すでに立派な大人に成長した。

3 アカデミックな経歴
カナダの大学では、コミュニケーション学と言語学を専攻。実はUCLAで生態学を教えていたこともあるのだ。

4 アメリカ先住民とも共闘
アメリカ大陸発見500周年記念の式典中、アメリカ先住民のグループに協力し、再現された大陸発見当時の船の一隻を乗っ取った。

5 動物のために創造力も発揮
アザラシの子を殺さず、ブラシで毛を採取する方法を開発したものの、カナダ政府の規制により阻止された。

6 政治家を目指したことも
これまで、カナダの国会議員選挙に3回立候補したことがあるが、すべて落選に終わっている。

意を抱いているし、この国の歴史も学んできました。ただ、どうにも理解しがたいのは、日本ほどの進んだ国が、保護区でクジラを殺す残忍な行為をなぜやめないのかということ。日本には自然崇拜に根ざした文化があります。賢明な長期計画を立てられる国でもあります。本当なら、日本人こそがSSを一番支持してくれるはずなので

す。失うものが最も大きいのは日本人なのです。彼らは間もなく、伝統的な食文化が深刻に脅かされる事実を目の当たりにするでしょう。文化の理解の問題ではなく、食材そのものが消えてしまうからです。海は人間の手で死に追いやられようとしています。海という唯一最大の生物の宝庫に未来がなければ、人類にも明日はないのです。

写真で見る、これまでのSS



(上から) 1994年、北大西洋で捕鯨への抗議を行っていたSSの「ホエール・フォーエバー号」がノルウェー海軍の船に衝突され、修復不可能に。1985年、SSは2隻のアイスランドの捕鯨船を、エンジン・ルームの海水バルブを開放して沈没させた。SSは2000年からエクアドル政府に協力し、ガラパゴスでの密漁防止のための海岸パトロール、設備提供、スタッフ訓練を行っている。アザラシを殺さずにブラシで毛を採取し、毛糸として利用する方法を開発したワトソンさん。

S 船や乗組員にはお金がかかると思いますが、資金はどこから出ているのでしょうか。

W スポンサーには資産家や有名人もいて、彼らからのまとまった寄付金で船などを購入しています。一般からの寄付金は、日々の運営に役立っています。オフィスなどの設備も寄付してもらっています。我々に焦点を当てたテ

レビ・ドキュメンタリー「Whale Wars」が大成功したことで寄付金が一気に増え、オリジナル商品の売り上げも急激に伸びました。現在、組織の収入は年間300万ドルを超えています。SSは最も資金効率に優れたNGOとして知られ、寄付金の80%以上が直接的な活動資金になります。これは、多くの乗組員、そして陸上で支援してくれる何千人という仲間たちのほとんどがボランティアであるおかげなのです。

S 対象となる海洋生物は、どのよう

え、ほとんど知られていないのです。S 逆にSSもメディアを利用していいようですが。

W そうでもないし違法行為に人々の目が向けられないからです。写真は映像は決定的な証拠になるし、見なければ知らずに終わってしまう人々もいるわけですから。私は、日本の有名な兵法家・宮本武蔵を尊敬しています。行動を起こす上で最も効果的なのは、ペンと剣の両方を使うことだと思



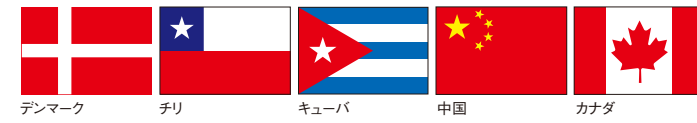
バットマンを思わせるSSの新しい秘密兵器「アディ・ギル号」は初の航海から3週間で南極海に沈んでしまった。「第2昭南丸」(上)との衝突で大きなダメージを受け、港までの牽引は不可能と判断した乗組員たちが去った直後のことだった(下)。

W すべての海洋生物を守るのが目的ですから、選んだりはしません。選んでいるのはメディアのほうです。例えばSSはガラパゴスでナマコを守る活動を数年来行っていますが、ほとんど知られていません。関心を引く生物ではないからです。フカヒレ目当てのサメの乱獲も同じです。醜い生物、怖い生物を守るための闘いは、メディアにとっては価値がないのです。実際、エクアドル政府との協働によるガラパゴスの世界遺産保護は、一番力を入れている活動です。そうした活動の存在さ

W 行く先々で人種差別主義者呼ばわりです。私はカナダ人ですが、カナダでアザラシ猟をする連中にそう呼ばれます。スカンジナビア

nearly dead!

アブナかった!



敵とあらば国は関係なし!

世界中の海で活動するSSは、これまで数十か国、数百という組織の数千人数の「敵」と闘ってきた。設立以来33年間、相手を国で選んだことは一度もない。

過

去30年以上にわたり、世界中の海で活動を繰り返している「シー・シェパード(SS)」。その主なターゲットは、密漁者だ。具体的な活動は、彼らが「好ましくない」と思った行為の告発・証言から、「違法行為」への実力行使にまで及ぶ。設備の破壊や敵船への衝突で敵の活動を妨害したり、なんと港に停泊中の捕鯨船を沈めてしまったことさえもあるのだ。これまでのSSの行動で人が傷ついたり命を奪われたりしたことはなかったものの、

立以来33年間、裁判所による法的措置を一度も受けたことがない。また、メディアを巧みに利用して世論を味方につけ、写真や映像を裁判所に提出し、「冤罪」であることを証明してきた。各界の有名人に支持を求め、多額の寄付金や直接的な協力を得ているほか、彼らの写真などを組織の宣伝に使用している。こうしたメディア戦略も、SSの得意技の一つなのだ。



ドクロのマークがシンボル

クジラとイルカの「陰陽マーク」付きのドクロ、そして「羊飼いの杖」と「海神の杖」。最もよく知られるSSのシンボルだ。

シー・シェパードがプロテクトしてきた動物たち。

クジラ

大西洋では「海賊捕鯨船」を撃沈して違法行為を見事に食い止め、北太平洋では旧ソ連による違法捕鯨を暴いている。現在は、世界一の捕鯨大国・日本が南極海で行う捕鯨活動をターゲットにしている。



アザラシの子

カナダでは、白い毛皮目当ての人間にアザラシの子たちが殺されている。これを阻止する活動は現在も継続中だ。ワトソンさんを含むメンバーが拘束され、身体的な攻撃を受け、船を押収されたこともある。

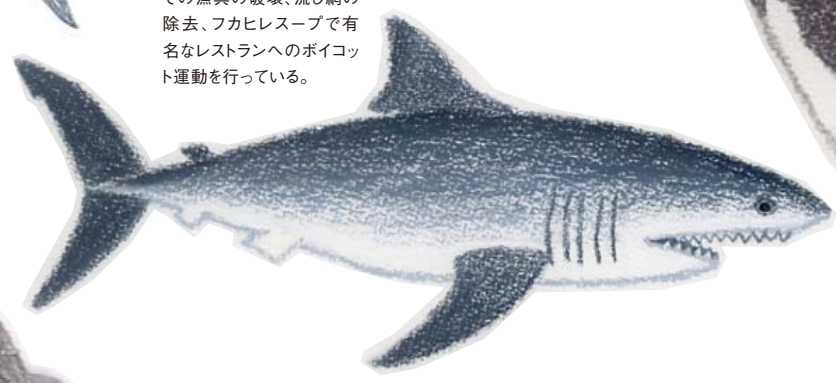
マグロ

南北アメリカのマグロを守るため、漁具の破壊など、違法な漁に対する攻撃行動を展開。今後は、地中海でクロマグロの密漁防止キャンペーンを開始予定。



サメ

フカヒレ目当てのサメの乱獲を阻止するため、禁漁区での漁具の破壊、流し網の除去、フカヒレスープで有名なレストランへのボイコット運動を行っている。



タラ

領海ギリギリのところで漁を行うキューバやスペインの漁船が、カナダ東部のタラ漁を脅かしている。SSはこれに積極的に立ち向かい、カナダのタラ漁を守っている。



サケ

カナダ西部では、激減しているサケの個体数を回復させるため、サケ漁の一時禁止を訴えるほか、養殖漁業の問題点や危険性に焦点を当てた運動も展開している。



ナマコ

ナマコの密漁を防ぐため、「ガラバゴス国立公園」と協働。設備の寄付やスタッフの訓練を行う。激減する個体数を回復させるため、ナマコ漁禁止運動にも協力している。



イルカ

イルカが犠牲になることもあるマグロ網漁にメディアを注目させ、「イルカに優しい」漁法を推進したのもSSだ。日本の和歌山県・太地町ではイルカ漁の妨害も行っている。



ターゲットにするのはどんな行為?

SSが最も力を入れている活動は、法律や条約に違反した「密漁」を阻止するためのパトロールや実力行使だ。また、「合法的だけど好ましくない」と思う行為を妨害する厄介者としても恐れられている。

- 公海での違法活動の阻止および海洋保護区での国際法等の行使。
- 各国領海で行われている、生物への「合法的な暴力」の妨害と記録。
- 漁業の取り締まりに関連した、政府関係者による汚職の暴露・告発。
- 流し網漁など、違法な手段による漁を阻止するための国際法の行使。
- 重油流出などで汚染された海の洗浄、負傷した鳥や海洋生物の救済。
- 天然記念物の密輸の監視や、その取引の実態を暴く活動。
- 世界遺産であるガラバゴスや、ココス諸島での密漁の阻止。

シー・シェパードの戦術とは?

「攻撃的な非暴力」、つまり、人を傷つけずに合法的な手段で敵を脅かし、妨害するというのがSSの戦術だ。設備破壊などの妨害行動は、敵に大きな金銭的ダメージを与える。味方の団体のために行う設備提供やメンバーの訓練なども、戦術といえるだろう。

- 各国政府の海洋資源保護への協力。設備提供やスタッフ訓練など。
- 公海での流し網など、違法な漁業に使われる設備の破壊。
- 設備の破壊や当局への通報などを含む、密漁の阻止活動。
- 違法な漁などを行う船への衝突、その他の妨害行動。
- スクリューにロープをからませ、敵船を航行不能に陥れる作戦。
- 吸着型機雷や海水バルブ開放で、停泊中の捕鯨船(無人)を撃沈!
- 違法な製品、絶滅が危惧される生物を使った製品の不買運動。

場所も標的も選ばない。

海の生き物を守るため、アタック!

世界の海を駆け巡り、行く先々で敵と味方をつくる「シー・シェパード」。敵密には合法的といえない戦術もあるけれど、その多くが非常に効果的だ。

photographs by Barbara Veiga & Sea Shepherd Conservation Society
text by SOTOKOTO illustrations by Daisuke Soshiki translation by Junsuke Tokano



ウミガメ

カリブ海や南アメリカでは、ウミガメの産卵期の海岸パトロールなどを展開。密猟者からウミガメとその卵を守るため、SSが目光らせている。



「Whale Wars」

SSの活動をドラマチックに描いたドキュメンタリー。こうした番組は知名度向上、イメージアップに最適だ。



探知犬

SSに訓練された犬たちが、ガラバゴスから密輸されるフカヒレなどを嗅ぎ出す「探知犬」として活躍中だ。



スピーカー

敵の気をそらすため、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」を大音量で流す。逆に気に入られてしまうかも。



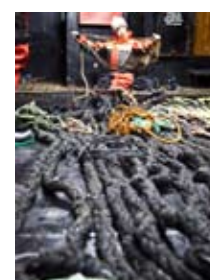
悪臭弾

「酪酸」、つまり腐ったバターは、臭いは強烈だが人体には無害。中身より逆に出る行為のほうが危険だ。



スリングショット(パチンコ)

酪酸入りのピンなどを敵船に向けて発射する道具。敵の機能を完全にマヒさせるのが狙いだ。



スクリュー停止ロープ

このロープは敵船の通り道に仕掛けるためのもの。スクリューに絡ませて、敵をストップさせてしまおうという作戦だ。



カメラ

写真や映像は違法行為の決定的な証拠となり、人々のSSに対するイメージも変えられる。まさに最強の武器だ。



放水銃

放水攻撃で「戦闘シーン」をリアルに演出するとともに、敵の甲板上での作業を妨害することもできる。




ヘリコプター

ヘリコプターで偵察すれば、速くの敵船もすぐに発見! メディアへの強力なアピールにもなる頼もしい武器だ。



アザラシをペンキで守る!

落ちない塗料で色をつければ、毛皮は使えないものにならない。これでもう狙われる心配はないね!




メリン
① オーストラリア
② 33歳
③ 船医、操舵手
④ 小児科医

⑤ 動物好きですが、仕事は人助けです。SSなら両方できるからです。

⑥ 動物の権利保護、気候変動の阻止のための活動に長く携わっています。食肉業界の残酷さと、その気候変動との関連性を知り、ビーガンになりました。倫理的に正しく生きる唯一の方法だと思いました。

⑦ 才能・スキルが豊かで、勤勉で自己犠牲精神にあふれ、船上での危険な仕事を進んで行く各国の人々と一緒に働ける点。

Merryn




ピーター
① スウェーデン
② 25歳
③ 一等航海士
④ クルー・コーディネーター

⑤ 海の生物を守るための法律がありながら、誰もそれを行使しないからです。政府にはその意思も、資源も、経済的動機もないのです。SSは海の生物を守る責任を与えてくれました。

⑥ 日本の食べ物や文化が好きで、ちょっとした「オタク」です。動物も人間同様に苦しむということを知り、ビーガンになりました。

⑦ 積極的な介入行動で動物たちを苦しみから解放し、残虐行為を阻止できること。

Peter



チャド
① アメリカ
② 24歳
③ 甲板員、ダイバー
④ 芸術家・冒険家

⑤ 海の生物を守るために、時間とお金と快適な生活を犠牲にしている人々が集まる有言実行の団体だからです。

⑥ 絵画や写真などの作品を制作しながら楽しく生きています。地球を破壊する食肉業界はこの世にいらないと考え、10年前にビーガンになりました。

⑦ 旅、人々との出会い、そして世界を変える活動……すべてです！ ボランティアとして働くことは、今までで最もやりがいのある充実した仕事です。

Chad




ラリー
① 南アフリカ
② 42歳
③ エンジニア
④ 建設技師、現場監督

⑤ 日本人は高度な文化を持つ、洗練された勤勉な人々なので、とても尊敬しています。でも、金儲けのために海を荒らす大企業は許せない。手遅れになる前に行動を起こし、阻止すべきです。

⑥ 発明好きでクリエイティブ。廃棄物から家具を作るのが趣味です。環境を破壊せずに入手した肉なら食べます。

⑦ 冒険、チーム・スピリット、世界を変える活動。これぞ今世界が必要としているものです！

Larry




デービッド
① カナダ
② 38歳
③ エンジニア
④ リフォーム会社経営

⑤ 動物保護活動に長く携わっていましたが、役立たずの保護団体に嫌気がさし、直接的な行動に出たいと考え参加しました。

⑥ 本職のスキルは、SSの船を扱いながら身につけました。年間9か月は仕事をして3か月はSSに捧げ、動物たちを救うことは一年中ずっと考えています。ビーガン歴17年です。

⑦ 寒冷地での活動が専門で、カナダのアザラシや南極のクジラを守る活動に特に力を入れています。

David



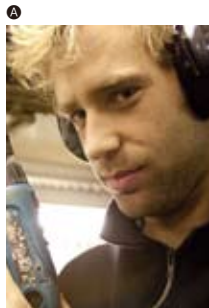
アナスタシア
① エストニア
② 24歳
③ ヘリコプター技術者
④ 芸術家

⑤ 2年前にSSを知って以来、直接的な行動で動物たちを守ることが夢でした。

⑥ アートやパフォーマンスをこよなく愛し、風刺やユーモアも解する芸術家です。畜産業界の残酷な実態を知り、ビーガンになりました。

⑦ 考えや関心を同じくする仲間たちに囲まれたのは、これが生まれて初めてです。自分たちの活動が海の生物を守るために役立っているということ、少しずつ実感しています。

Anastasia



ウィツェ
① オランダ
② 26歳
③ 船大工
④ バイオリン製作者

⑤ 大切な環境とクジラを守る組織のために、自分の木工技術を生かせると思ったからです。

⑥ 畜産業・漁業に関する文献を読むうちに、世界観が変わってきました。何を何のために食べてゆくべきかを自問した結果、ビーガンとして動物たちを尊重し、自然環境と自分の健康を守ろうと決心しました。

⑦ 世界中の野生動物を守るため、最も積極的に戦う人々と協働できるところが魅力です。SSの一員であることをとても誇りに思っています。

Wietse

耐 水山設計にもなっていない使い古しの船で、南極へ向かって世界一危険な海を渡ろうなんて、よほどの情熱と勇氣と無鉄砲さがない限り思いつかないこと。

実際、ワトソンさんも「我々の活動のリスクを考えると、乗組員たちの苦勞はお金で報われる次元ではないよ」と口癖のように言う。そんな「シー・シェパード（SS）」のメンバーって、一体どんな人たちだろう。

ほとんどのメンバーは25歳から35歳で、男女比はほぼ均等。職業・出身国ともに様々だが、共通語は英語だ。その多くが高学歴で、すべてのメンバーが活動に情熱を注いでいる。そして、一部の中枢メンバーを除いたほぼ全員がボランティアだ。

これまでの参加メンバーは、設立以来33年間で累計45000人を超えている。未経験者が多かったため、メンバー間でのスキル指導、知識の共有を徹底し

ている。三度の食事が唯一の「報酬」で、船内で用意されるのは「ビーガン」、つまり肉だけでなく卵や乳製品などの動物性のモノをいっさい食べない「完全菜食主義者」向けの料理のみである。船内は禁煙で、特別な機会がない限り酒も飲まない。「クルーズをエンジョイ」なんていう言葉とはほぼ無縁な世界だが、本人たちはそれなりに楽しんでいるご様子だ。

メンバーへの質問
① 国籍 ② 年齢 ③ 役割 ④ 普段の職業
⑤ なぜSSか ⑥ 自分について一言 ⑦ SSの魅力




クジラのために一致団結！ シー・シェパードの乗組員紹介。

海の経験はゼロなのに、古い船で世界一危険な海へ繰り出す「勇者」たち。そんな「シー・シェパード」で活躍する、20人のメンバーをご紹介します。

photographs by Barbara Veiga, Joanne McArthur, Glen Lockitch, Anna Wloch & Sea Shepherd Conservation Society text by SOTOKOTO translation by Junsuke Tokano

©IT'S A WILDLIFE



ビンセント


- ① オーストラリア
- ② 58歳
- ③ 三等航海士
- ④ バイオリン製作者、会社経営

⑤ 一つの組織として、世界を変える機会を各個人に与えてくれるからです。

⑥ 正直で自由な発想を持つ、30年来の厳格なベジタリアンです。信じること、大事なもののために命がけで闘うことなくして、私の人生はありえない。

⑦ 世の中には私の嫌いな「上辺だけの人生」を送る人が多いけど、このクルーは違います。捕鯨者たちに真実を突きつけ、世界を変えるためなら、皆命さえ惜しまないのです。

Vincent



クリスティン


- ① フランス
- ② 27歳
- ③ キッチン担当
- ④ ビーガン料理のシェフ

⑤ 動物たちを守ることで人生を変えたいと思いました。SSに参加することで、声なき人々に代わって立ち上がっています。

⑥ 5年前にビーガンになったのは単に倫理的な理由からでしたが、健康にもとてもいいですよ。

⑦ 氷山、ペンギン、アザラシ、そしてクジラたちを見ながら世界の果てまで航海して、その素晴らしい生物たちの命を守ってあげられること。これは、人生観を変える経験です。

Christine



スティーブン


- ① オーストラリア / イギリス
- ② 27歳
- ③ エンジニア
- ④ ビーガンカフェ、輪業

⑤ 海の生物の命を救うことで世界を変えるチャンスを与えてくれる団体なので、参加しました。

⑥ 自分のせいで苦しむ動物を減らしたかったこと、そして自分が消費するだけのために動物の命が奪われてしまうことに耐えられなくなったことから、8年前にビーガンになりました。余暇はドラムを叩いたり、チャンスがあれば自転車に乗ったりもしています。

⑦ 動物たちの命を救えることですね。エンジニアとして技術も実践を通して学んでいます。

Stephen



クリス


- ① アメリカ
- ② 40歳
- ③ ヘリコプター操縦士
- ④ ヘリコプター操縦士

⑤ 海軍・民間のヘリコプター操縦士として働き、何か別のことにチャレンジしたいと考えていたところ、SSなら僕の愛する「世界中の海」と「ヘリコプター操縦」の双方に関われることを知りました。

⑥ 動物や地球を守る以外、家具作りを楽しんでいます。

⑦ SSに参加して5年になりますが、好きなヘリコプター操縦をしながら大いなる使命を果たせるというのは大変なことです。

Chris



ダン


- ① アメリカ
- ② 30歳
- ③ エンジニア
- ④ ロボット工学者

⑤ SSに参加するため、NASAへの就職を断りました。全然後悔なんかしてませんよ！

⑥ 「環境への負の影響を最小限にとどめたい」「動物を殺さずとも生きていける」、そんな思いからビーガンになりました。お酒は飲んだことないけれど、とってもGenkiです！

⑦ 努力がすべて使命の遂行につながる。お金のために働いていないということ。そして志を同じくする素晴らしい仲間たちと仕事をできること。

Dan



ブライアン

- ① アメリカ
- ② 24歳
- ③ エンジニア
- ④ コック

⑤ 海が破壊され、そこに棲む動物たちが殺されている中で、直接的行動でそれを阻止しようとしているのはSSだけだからです。

⑥ 職を転々として身につけた様々なスキルが船上で役立っています。残虐な動物実験や食肉処理、酪農業界への怒りから、7年前にビーガンになりました。

⑦ 地球を守るために闘うクルーの一員として船に乗っていただけることです。船上では様々な実践的スキルも学んでいます。

Brian



トール


- ① スウェーデン
- ② 26歳
- ③ 甲板員
- ④ コンサートの舞台作業員

⑤ 動物保護活動に長年携わっていました。海での経験がなくてもOKと聞いてSSに参加しました。志願してから2年待って、ようやく乗船を許可されました。

⑥ 自国近辺で、海を荒らしているヨーロッパ人達を阻止すること、環境教育者になることが目標です。これらの海で実際に起きている問題は、「距離」、そして「無知」という壁に閉ざされ、明るみに出ないのです。

⑦ 強い仲間意識、目的意識、信頼感です。この経験を胸に生きていこうと思っています。

Tor



マット・キムラ

- ① 日系アメリカ人
- ② 50歳
- ③ 甲板長
- ④ 船員、高校教員

⑤ 教え子たちが、クジラを殺すことにひどく憤慨したからです。「クジラが愛すべき動物として守られ、レストランや給食のメニューにならない世界を実現するためにできる限りのことをする」と教え子たちに約束して来ました。

⑥ 大小様々な船で外洋を航海した経験が豊富です。

⑦ SSは、保護区でクジラの命を守る活動に参加し、教え子たちとの約束を果たすチャンスを与えてくれる組織です。

Matt



ベンジャミン


- ① オーストラリア
- ② 30歳
- ③ 甲板員
- ④ 大学院生(海洋科学・海洋管理学)

⑤ SSは海の破壊を阻止する組織です。無知で欲望な人間たちから地球を守るために最前線で闘おうと思ひ、参加しました。

⑥ ジョークを言ったり、歌やダンスを楽しむ明るい一面もあります。海が破壊されるのは本当に悲しいことです。畜産業のせいで、ニワトリやブタが人間以上に大量のシーフードを食べることになるのです。

⑦ 仲間のクルーから多くのことを学び、命を救う活動に参加できています。

Benjamin



ポール


- ① イギリス
- ② 23歳
- ③ 操舵手
- ④ 学生(環境工学専攻)

⑤ 世界を変える組織を探していたところ、数多くの活動に成功してきたSSに出会いました。

⑥ 倫理的な理由、そして環境を守るためにビーガンになりました。趣味は、いろいろな国のビーガン料理を作ってみること、楽器演奏、キャンプです。

⑦ SSのクルーに加わることは、何百頭というクジラや他の海洋生物の命を守るための重要な活動に参加することを意味します。僕の人生に欠かせない、誇りを持って活動です。

Paul



マルコム


- ① オーストラリア
- ② 34歳
- ③ 航海士
- ④ 船員

⑤ 豊かで自由な時代を生きる私たちは、非常に恵まれています。モノや社会的地位を得ようと躍起になる生き方に虚しさを感じる私にとって、SSは真の自己表現の場です。

⑥ かなり昔からビーガンです。非公式教育にも力を入れています。

⑦ 生物多様性を維持するための闘いは、社会を真の発展に導きます。責任感と謙虚さを持って生きなければならぬということも、SSでの活動から学びました。

Mal



アーン

- ① ドイツ
- ② 27歳
- ③ 甲板員
- ④ 環境保護活動家

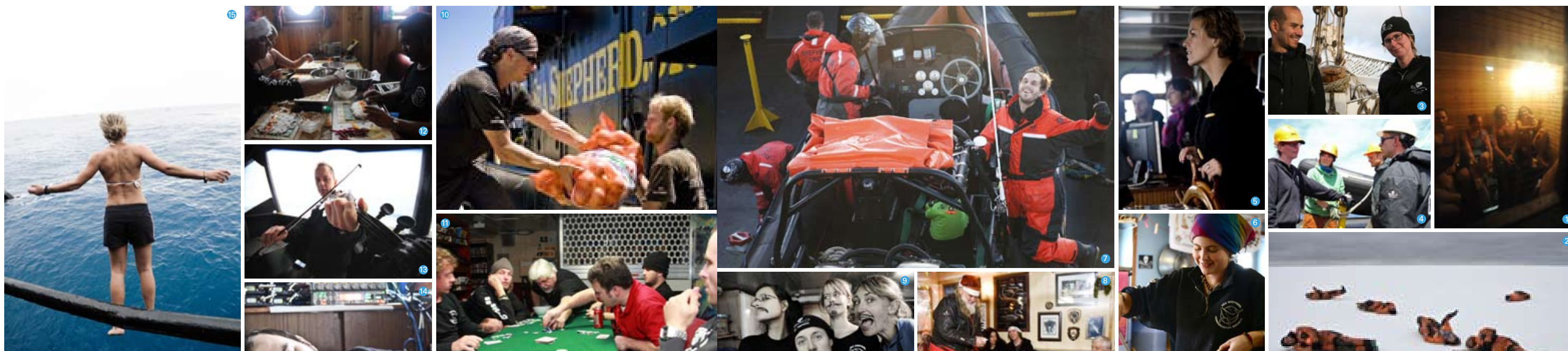
⑤ 金儲け主義の企業が海を破壊しています。クジラやイルカたちのために闘う勇猛な活動家たちに加わりたいと思い、参加しました。

⑥ ダイバー、そして陸上に生きる者として、海という環境を守ることが自分の使命だと知りました。このことが、ビーガンになるきっかけにもなりました。

⑦ ビーガンとしてのライフスタイルや動物性食品を摂取しない健康的な食事についていろいろ学んでいます。毎日が新しい発見です。

Arne

① 氷山が浮かぶ寒い海でのサウナは格別! ② 巨大な氷山の上で「アザラシごっこ」。③ ダンとソフィーは、船上で恋に落ちたカップル。④ 男女関係なく過酷な任務に取り組むことも。⑤ アニマルプラネットの「Whale Wars」では視聴者を魅了したシャノン。⑥ シェフのローラ率いるチームが、毎日120食を用意。⑦ 日本の捕鯨船と闘うため、「デルタ号」を準備。⑧ プレゼント交換で「船上のメリークリスマス」。⑨ キッチンでたわむれる女性メンバーたち。ヒゲがとってもお似合いです。⑩ 物資のほとんどは寄付によるもの。船の停泊先に送られてくる。⑪ 船内での娯楽といえば、ポーカーやボードゲームが人気だ。⑫ 「ビーガン寿司」も人気メニューの一つ。⑬ メンバーには、ミュージシャンやアーティストも多い。⑭ 海が荒いため、夜の熟睡はムリ。だから昼寝は自由です。⑮ 新年恒例の「ペンギン・ジャンプ」。メンバーは次々に冷たい南極海へ飛び込む。⑯



被害が見えてきた。特に日本人の海産物に対する欲求が与えている打撃はひどい。今、海で起きていることを、私たちは本当に知っているのだろうか？

日本人として船に乗り組むことは正直とても勇気のいる決断だった。船での生活自体が初めてだ。仕事は毎日休みなく続く。止まることのない海の揺れとエンジン音と振動。耳栓をしての睡眠。ビーガンのシェフが寄付された食材で作る料理が疲れた体を癒す。肉を使わなくてもこ

んなにおいしいんだ。私は乗組員たちと話していくうちに、彼らを尊敬し始めた。年齢・国籍に関係なく、自分たちの心に従って他の動物への負担を最小限に抑えられる生き方を選んでいる人たち。自然を愛して互いを大切に思う人たちに囲まれることができうれしい。

クリスマスの日、ひどい悪天候で海が大荒れだった。ポール船長が、尾行している日本船に向けてメッセージを書き、私が読み上げた。「お互いの健康と無事な航海を祈る」というメッセージだった。

シー・シェパードは確かにコアでハードな団体に見えるかもしれないけれど、盲目になっているビジネスマンたちと地球の奇跡の美しさを感じていない人たちの目を覚まさせるには、こういう団体があってもいいと思う。利益のために野生動物を殺し続けなければならない会社の見聞と、世界中の人々からの寄付で成り立つNGOの見聞と、どちらを信じるのかは、あなたの心次第です。

マリコの理由。

こういう団体があってもいいと思う。



私がステイブ・アーウィン号に乗ったのは、南極海へ向けて出航する直前だった。アメリカで大ヒットしているテレビ番組の「Whale Wars」も見たことがなかった。ただ、オーストラリアで、「Stop Japan Whaling」と印刷されたTシャツを着ている女性を見かけたとき、まず地球に生きる人間として、そして日本人として無視してはいけないと思った。勇気を出して話してみると、彼女の口から切羽詰まった思いが涙とともにあふれ出てきた。その時、初めて南極海で起きている悲惨な大量のクジラ捕殺について知った。

野生動物も家畜も、同じ価値の命をもって地球に生まれてくる。クジラは長い年月をかけて子育てをし、子守唄を歌う。鯨類は地球上で最も霊性が高い動物だともいわれる。無償の愛を与えてくれる植物・動物たちが人間の経済活動に利用され、殺戮され続けている。

自然と調和する生き方を学び始めると、食べ物からシャンプーまで、今までいかにテレビ番組や広告に惑わされてきたかがわかった。いわゆる一般的な栄養学を過信していた私は、動物性食品を一切食べないビーガンの人たちに出会った時はとても驚いた。彼らの肌も髪の毛も健康的で、目もキラキラと輝き、心の芯の通った人たち。大きな体格の人もいた。私の頭にたくさんの疑問が浮かんできた。そして、企業のセールス文句にはめられた私たちの現代の食生活が及ぼしている、自然環境と家畜たちへの悲惨な

仲間になって、わかること。

日本人乗組員の声。

シー・シェパードの反捕鯨キャンペーンにクルーとして参加したふたりの日本人女性がいいます。マリコさんとマイさん。船に乗り組んだきっかけ、現場で感じたこと、野生動物への想いを綴ってもらいました。

photographs by Barbara Veiga & Mai
text by Mariko & Mai illustration by Ryohhei Yamashita

パードが暴力を駆使して捕鯨活動を妨害していると報道していますが、私が参加していた際には、たびたび捕鯨船団から「攻撃」を受けました。彼らは至近距離で私たちに金属片を投げつけたり、LRAD（長距離音響発生装置）で聴覚能力を狂わせようと試みました。こういったことを実際に体験し、その事実が一般の日本人の方々に届かないのは非常に残念です。

キャンペーンに参加する前に家族の同意は得られませんでした。日本ではクジラを食するのは当たり前だという考えとシー・シェパードは「エコ・テロリスト」だという認識があったためでしょう。現在は家族を含め、日本人の友人たちも私が活動していたことをサポートしています。海洋生物保護の観点からシー・シェパードに協力したことを理解してくれたのだと思います。私は絶滅の危機に瀕している野生動物が人間の利益追求のために利用されるということが認められず、こういった行為には国、人種を問わず反対します。

私のシー・シェパードへの協力を「日本人として許せない」と感じる方もいるかもしれません。しかし、私は日本人としてこの問題を無視できず、少しでも双方の意見の食い違いが解消されればと願い、参加しました。

「クジラ問題」は私たちが一番身近に感じる環境問題の一つです。私は日本人の方々の理解と協力によって捕鯨問題が解決できる日が来ることを信じています。

マイの理由。
事実を日本の人たちに届けたい。



私は2008年12月上旬から09年2月下旬に南極海で行われた反捕鯨キャンペーン「オペレーション武蔵」に参加しました。初めてシー・シェパードの存在を知ったのは、05年にオーストラリアのメルボルンを訪れた時です。友人に「南極で反捕鯨活動をしている船が停泊している」と誘われ、知識もないまま、興味本位で出かけました。しかし、船の中を見学した際、「日本の捕鯨船団」や「日本政府」といった言葉が繰り返し使われ、海洋生物の

保護活動についてとても熱心に語るクルーたちの様子から「この問題には何か奥深いものがある」と感じました。日本政府が行う南極捕鯨では、毎年約4か月の間に950頭のミンククジラとナガスクジラが調査捕鯨という名目で捕殺されます。1986年に国際捕鯨委員会がすべての商業捕鯨にモラトリウム（一時停止）を採決したにもかかわらず、それ以降も捕鯨船団は南極海に出向き、クジラを殺し続けます。その活動費用には私たちが納める膨大な額の税金が使われます。私は動物性食品を一切食しませんが、食文化が多様化したこの時代になぜクジラを殺さなければいけないのかということも疑問です。

オペレーション武蔵ではステイブ・アーウィン号から日本語でメディアリリースを発信し、また捕鯨船団との交信の通訳をしました。日本で報道される南極捕鯨と海外メディアが取り上げる内容は大きく異なります。日本のメディアは、シー・シェパードの行動を一斉に非難し、シー・シェ





上右 / SSに入ったことを後悔していないスタッフが、唯一心残りなことがある。母国スウェーデンのパンク・ロック・バンドを脱退しなければならなかったことだ。上左 / ビーガン料理を楽しませてもらったのも、僕にとっては非常に貴重な経験だった。下右 / 乗組員の交代は、辛い別れの時でもある。彼らの気持ちは手に取るように伝わってきた。下左 / 新しい「武器」を見せてくれるワトソンさん。といっても、もちろん本物の卵ではない。「水で膨らむオモチャのワニ」が入ったユーモラスな武器だ。

パースへ向かう機内で、資料を読むうちに変わっていったイメージ。

あの朝僕は、退社したら久しぶりに泳ぎにいこうと水着を用意していた。しかしその夜いた場所は、プールではなく、西オーストラリアの州都、パースだった。その日「シー・シエパード」からポール・ワトソンさんへのインタビューがようやく許可されると、その数時間後にはもう成田へ向かっていった。あまり気が進む仕事ではなかった。母国の夏の陽射しがイヤだったわけではない。シー・シエパードという組織のメンバーが、どうにもいただけでない連中だったからだ。「自分たちが一番正しい」と思い込んで勝手なモラルを他国に押しつける、よくある欧米人の偽善者集団にしか思えなかつ

たのだ。地球が悲惨な状態にあることは十分承知している。しかし、自分も欧米人の一人であること、そしてそうした悲惨な状態を招くうえで欧米諸国が大きな役割を果たしてきたことを考えると、他国の文化を見下す欧米人は不快にしか思えなかった。自分たちの国でも動物を殺し、食べていることを棚に上げ、他国の食文化にケチをつける連中なんて偽善者以外の何者でもない。そんな思いを巡らせながらも、シー・シエパードの歴史やワトソンさんの資料を機内で読み始めた。着陸する頃、シー・シエパードの見方は大きく変わっていた。彼らは単なる反捕鯨団体で、日本だけを標的にしているものと思っていた。日本のメディアを通じて知った人々は、ほとんどがそう思っているだろう。ところが、その最も長期にわたる最も攻撃的な活動が欧米諸国に向けられているというのを知ると、「人種偏見」「自文化中心主義」といった見方は改めざるを得なかった。クジラの保護は海や海洋生物を守るための幅広い活動の一部にすぎないと知り、彼らの目的もよく分かった。また、海を破壊する違法行為を阻止してきた功績には、ただ感心させられた。攻撃的なやり方には反対だったが、30年を超える活動の中で誰一人傷つけていないということを知ると、単純に「エコ・テロリスト」というレッテルを張ってしまうことにも抵抗を覚えた。僕は、シー・シエパ



スティーブ・アーウィン号の上でポール・ワトソンさんと会った。ワトソンさんが僕を船に案内してくれた。

パースの港で、彼らと過ごした一日。

この目で見てきた、シー・シエパード。

ドクロのマークをはためかせ、黒塗りの船で海上を駆け巡る「シー・シエパード」。実際に会ってみると、そんな「海賊」のイメージとは全く違う人たちでした。いったい彼らがどんな組織なのか、あまりよく考えていなかった自分に気づかされた一日でした。

photographs & text by Steve Jarvis translation by Junsuke Tokano
写真・文●スティーブ・ジャービス（本誌編集部）



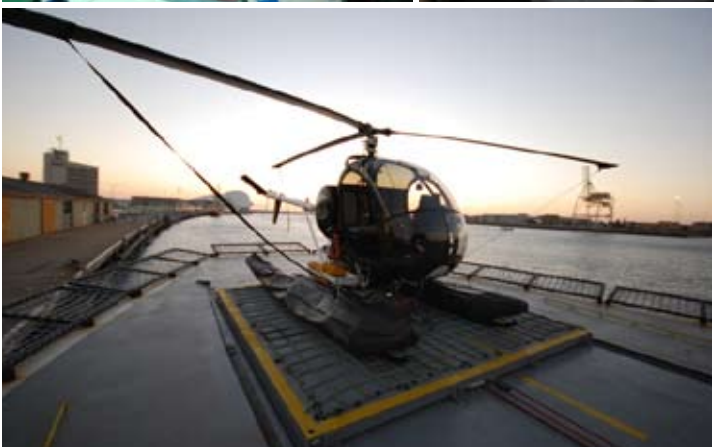
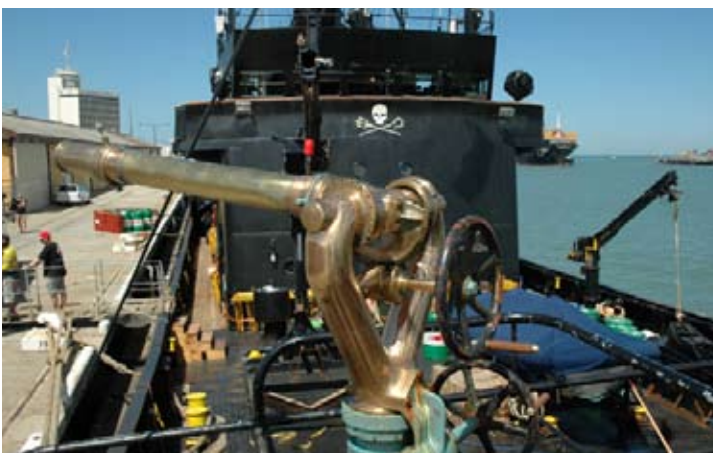
給油のため、パースに寄港中の「シー・シエパード」の船。





活動再開のため、パースのフリーマントル港を後にするスティーブ・アーウィン号。日本の調査捕鯨船に侵入し、逮捕されたピーター・ベスーン容疑者もこの船に乗っていた。

捕鯨問題を「食文化の対立」にとどめてはならない。



上／この古い消防ホースも、メディアを意識したオブジェだ。中右／環境保護活動への情熱からロボット工学者への道を捨てたダンは、エンジンルームを担当。中左／陸地へ出かける前、買い物リストを広げて話し合うワトソンさんとメンバーたち。下／ヘリコプターのおかげで視野が広がり、敵船の発見も容易になった。下右／沈没直前の「アディギル号」から持ち出した、「お守りボード」。



ードをもっと知りたくなっていた。

スティーブ・アーウィン号を訪れたその日、彼らはまず「ビーガン」向けの朝食を振る舞ってくれた。食堂を出入りする乗組員たちと言葉を交わしながら食べたその朝食は、質素だが味は良かった。一通り船内を案内してもらった。翌日南極海に戻るための準備にいそむ乗組員たちから、邪魔をすまいと気を配りつつ話を聞く。彼らは友好的で話しかけやすく、これまでの経験やSSに参加した理由などを率直に語ってくれた。メンバー間の結びつきも強く、通常の生活に戻るため船

を去る乗組員は涙で見送られていた。

そしてそこには、乗船を待ち望んでいた交代メンバーの笑顔もあった。その日出会った人々は知的で、環境問題への知識も深いというのが全体的な印象だった。そして、何かを変えようという彼らの勇気と熱意には、感服せずにはいられなかった。

再びビーガン料理を楽しませてもらうと、インタビュウの時間になった。船長室で向かい合ったワトソンさんは、自信に溢れ、かなりメディア慣れしている様子だった。人種差別、自文化中心主義、食文化への偏見などの話題を取り上げても、喜んで「挑戦」に応じ

てくれた。そして、海を守るという高度な理念のため様々な敵と闘ってきた歴史を引き合いに、僕の問いをかわしていった。彼にとって、他人が自分をどう思うかは、果たすべき使命とは無関係のどうでもよいことなのだ。ワトソンさんの観点では、人間そのもの、または人間中心主義的な考えこそが元凶で、他の生物を攻撃し続ける人間から地球を守るため、可能な限りのことを行っているだけなのだ。

ワトソンさんの目標が、海洋生物の保護にとどまらないことは確かだ。彼が本当に闘おうとしている相手は、「人間は無限に消費を続けられる」という

陽が落ちる頃、乗組員たちが地元のパブに誘ってくれた。捕鯨や環境問題について議論し、特に日本という国についていろいろと語り合った。彼らの日本に関する知識や考えは、極端なほど捕鯨問題に偏っていた。そして「普通の日本人はクジラなんてめつたに食べない」ということに、多くが驚きを隠さなかった。日本人と自然の関係にはプラスの面も多数あること、そして日本人の技術や環境活動が多く分野で世界をリードしていることについても、彼らはほとんど知らなかった。こうした知識の欠如は、日本人以外の相手と日本の環境維持へのアプローチを議論する時、必ずといっていいほど認められる。環境問題という人類共通のテーマに言葉や文化の壁を越えて協力して取り組むことの難しさを、浮き彫りにする事実だ。

日本と母国のオーストラリアにこうした不協和音が生じているのは、苦痛である。だが、僕が一番心配しているのは、SSと捕鯨者らとの対立ではない。彼らは、それぞれが特定の課題に基づいて行動する特定の集団で「やるべきこと」をやっているに過ぎず、ただその目的が相容れないだけなのだ。最も不安なのは、こうした特定の集団同士の対立が、各国にどのように映るかということであり、国家の威信に関わる問題とされてしまうことが多いという事実だ。捕鯨問題が重要でないというわけではない。気候変動や生息地破壊、生物多様性という地球全体の課

題に共同して取り組むには、異文化間の対話と理解が不可欠であり、捕鯨問題がその妨げとなってはならないのだ。むしろ、違いを克服するチャンスとしてとらえるべきだ。人間が一つの種として地球上に存続するためには、自文化への誇り、動物への愛着心といった次元を離れ、人類全体として一つの決断をしなければならぬ。

日本人がクジラを殺して食べる権利を持つことは、欧米人が様々な生き物を殺して食べる権利を持つのと同様である。動物を残酷に扱ってきた欧米諸国には、捕鯨のことで日本にこれこれいう権利はない。だが、この重要な分野の問題を、単に国家主義的な視点で扱うわけにはいかない。この問題はクジラに限られたものではなく、すべての海洋生物、ひいては地球上の全生物に関わる問題だからだ。消費可能な資源に限りがある事実を人類が受け入れなければならぬ時期が、すぐそこまで来ている。これは自然そのものの限界であり、それを理解することが、未来の世代に対する我々の責任なのだ。我々が当たり前のように享受しているものは、未来の世代も享受する権利がある。SSは悪者扱いされ、テロリストとさえ呼ばれているが、未来の人々にとって英雄となることを、ワトソンさんは確信している。彼の考え方は挑発的だが、これをきっかけに、我々一人ひとりが個人として取る行動が地球の未来をどう左右するか、考えるべきではないだろうか。